

# 教育研究創発国際研修における学術活動報告書

令和 5年 9月 1日

氏名 緒方 亜文

所属 教職開発 コース

指導教員名 藤江 康彦 教授

1. 研究課題 コミュニケーションとしての発達支援
2. 報告する学術活動の実施期間 令和 5年 8月 9日 ~ 令和 5年 8月 10日
3. 日本学術振興会特別研究員 (DC) の現在の採用状況 DC1 DC2 採用無し
4. 学術活動
  - 国外 国内
  - ①英語論文公表
  - ②研究科教員の研究プロジェクト参加
  - ③フィールドワーク
  - ④国際会議 (研究発表 運営補助 出席のみ)
  - ⑤研究会 (研究発表 運営補助 出席のみ)
  - ⑥研究指導委託
  - ⑦留学
  - ⑧国際研修
  - ⑨国際インターンシップ
  - ⑩その他 (具体的に: )

## 5. 学術活動実施の概要

※上記4で選択した学術活動について具体的に記載してください。括弧内の概要を必ず記載してください。

- ① 英語論文公表  
(著者、発表論文名、掲載誌名等、発表年月巻号、発表年月日等、論文内容の概要)
- ② 研究科教員の研究プロジェクト参加  
(プロジェクト名、代表研究者名、自身の具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、プロジェクトの概要)
- ③ フィールドワーク  
(調査先機関等、国名・都市名、具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、調査先の概要)
- ④ 国際会議  
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、学会・会議名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑤ 研究会  
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、研究会名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑥ 研究指導委託  
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究、研究テーマと受入教員、受入期間(年月日)、具体的な研究活動、研究発表内容等の概要)
- ⑦ 留学  
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究科、受入期間(年月日)、具体的な履修状況、研究発表内容等の概要)
- ⑧ 国際研修  
(プログラム名、派遣先機関、国・都市名、派遣期間(年月日)、プログラム概要、研究発表内容等の概要)
- ⑨ 国際インターンシップ  
(プログラム名、派遣先機関、配属部署、国・都市名、派遣期間(年月日)、具体的な活動、プログラム内容等の概要)
- ⑩ その他(具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度等の概要)

学術活動区分 (①～⑩を記入)	④
<p>2023年8月7日より11日までに開かれた、東海大学湘南キャンパス(神奈川県平塚市)にて行われた国際会議「40th Annual International Human Science Research Conference」にて研究発表を行った(発表日:8月9日)。この国際会議では、口頭発表・ポスター発表等の発表種別の設定は無いものの、スライドを用いて口頭で20分間のプレゼンテーションを行い、10分間の質疑応答を受けた。</p> <p>以下に、発表の概要を述べる。</p> <p><b>【題目】</b> Two hands as one counting tool: A discursive approach to teaching a student with ID/ASD to use fingers in counting (一つの数える道具としての二つの手: 数える際に指を使うことを知的障害と自閉スペクトラム症のある生徒に教えることへの談話的アプローチ)</p> <p><b>【内容】</b> 人間の手には左右に5本ずつ、合計10本の指がある。よって、10までの数を数えるために用いることは理にかなっている。しかし、生徒と教師のコミュニケーションでは左右の手が異なる社会的・物理的な位置に置かれる場合があり、数えるための一つの道具として認識することが必ずしも自然とは言えない。知的障害のある子どもについては、その認知の特性上、数詞や数字と指を対応させることが困難であると考えられているが、前述のような身体の複雑さを踏まえるならば、その困難さを相互行為の時間的進行・空間的配置の中で捉える必要がある。</p> <p>本研究では、中学校特別支援学級の数学の授業を録画・録音した。そのうち、中程度の知的障害と自閉スペクトラム症を持つ生徒に対して教師が、両手の指を使って足し算と引き算を行うことを指導する3時間の授業を対象として、身体の動きも含めた談話の質的な分析を行った。心理学的概念が相互行為の中でいかに立ち現れるかを探求するディスコース心理学の枠組みに加え、言語人類学者の Charles Goodwin の提唱した「環境に接続された身ぶり」の概念を用いて分析を行った。</p> <p>その結果、生徒が数詞に合わせて指を動かしていたとしても、それが教師の数詞と対応する指の運動としてのみ捉えられ、かつ教師が純粋に空間的な表現(例えば「残ってる指」)を用いる場合には、左右の手の片方のみを数える対象と見なし、数えるべき指を「忘れる」ことがあること、一方で、プリントの数式の表象として指を動かしており、かつ教師が数学的な表現(例えば「答え」)を用いる場合には、左右の手は必然的に一つの道具として数えられることなどが示された。</p> <p>これらから、両手の指を使って数えることの困難さは、皮膚の下の認知としてのみならず、身体的なコミュニケーションのずれとして概念化することができることが主張された。</p>	

- (注) ① 年月日は西暦で記入してください。  
 ② 英語論文発表については報告する学術活動において発表又は受理されたもの。  
 ③ 上記に記載しきれない場合は、ページを追加しても差し支えありません。  
 ④ 複数回の学術研究活動による報告の場合、適宜本ページを追加し、2つ目以降についても必要な内容を網羅してください。

## 6. 学術活動による成果

※報告する学術活動について、教育分野における国際的リーダー人材の育成とその研究成果を海外に発信することを目的とした教育研究創発国際研修の趣旨に照らし、その成果を具体的に記載してください。学術活動により得られた自身の研究課題につながる成果についてもわかるように記載してください。

※本欄に書ききれない場合、ページを追加しても差し支えありません。

### 【学術活動による成果】

前節で概要が述べられた研究の発表を行うことで、「指を用いて数える」ことの複雑さと、その困難さをコミュニケーションのずれとして捉えることができることについては、ある程度伝えることができた。特に、両手を一つの道具として数えることが成り立つ要因については、考察部分において図解によって示すことができた。

一方で、国内外の研究者より、以下のような指摘を受けた。(1) コミュニケーションのずれが、対象とした生徒の、数についての理解が実際に不足しているために生じている可能性は無いのか。(2) 複雑な身体的な動きを伴う場面なので、ビデオを示した方が分かりやすいのではないか。

(1) については、相互行為や談話の中で「(認知的な) 障害」を捉える研究を行っていく上では、避けては通れない批判であると考えられる。要因の複雑さを描くことを志向した質的研究とはいえ、関連する要因を絞り込むことができるような問いを立てることの必要性を痛感した。

(2) については、スライドが次から次へと移動してしまう口頭発表においては、特に、情報を絞り込むこと、場合によってはビデオを活用して視覚的に示すことが必要であったと考えた。

### 【自身の研究課題につながる成果】

私の研究課題は、教室における障害を、子どもと教師のコミュニケーションのずれとして捉えることで、発達支援の過程を、そのずれの相互行為的な修復として描き出すことである。ここで相互行為的というのは、子ども教師も相手の様子を見ながら次の行為を組み立てているという意味においてである。

前述の(1)に付随して、そうした相互行為の特徴そのものを描くのか、その中で認知がいかに構築されるのかを描くまで言及するのかを区別し、問いを絞るべきであると考えた。(2)に付随して、このカンファレンスでは、言語的・非言語的なコミュニケーションの分析を行った先達の研究者の発表を見ることができ、今後の手本となるべきものであった。